

S  
M  
O  
N  
研  
究  
の  
思  
い  
出

# 緑の天啓

井上尚英

海鳥社

真実は、  
われわれの前にたびたび顔を現しているのであるが、  
現実にはつきり捉えられるまでには、  
かなり時日を要するものである。

——豊倉康夫

## はじめに

平成一九年秋、ある大手の医学書出版社から、このたび内科学の教科書を改訂し、出版することになり、私に「キノホルム中毒」を執筆して欲しいという手紙を受け取りました。私は、これまでほとんどの内科や神経内科の教科書には中毒性疾患のうち、金属中毒、ガス中毒、有機溶剤中毒、農薬中毒については常連の執筆者となっておりました。しかし、医薬品中毒の執筆依頼はまだきたことがなく、「何で私がいまさらキノホルム中毒を」といぶかっておりました。しかし、ひょっとしたら監修者で私のことをよく知っておられる方の特別のご指名によるのかもしれないと思い返し、執筆をお受けすることにした次第です。

折しも、北九州八幡東病院の副院長をしておられる先輩の岩下宏先生から、「スモン劇場<sup>\*</sup>」と題する総説の別刷を送っていただきました。

岩下先生は、ながらくSMONの治療に携わってこれ「特定疾患スモン研究班の班長」を務めてこられた方であり、スモン訴訟裁判の際は鑑定医として大変ご苦労された方

です。先生は、九州大学神経内科が発足した昭和三九年に最初に入局されました。私は昭和四〇年の入局ですので、先生は一年先輩です。入局時からずっと先生とご一緒に臨床をつづけ、色々とお世話になりました。

先生の総説を読ませて頂き、かつての私のSMONにかけた情熱と苦労の懐かしい思い出がまざまざとよみがえってきました。

発足したばかりの神経内科の外来には、毎日のように足のしびれを訴える新患の患者が押しかけてこられるようになりました。病室もしびれの患者でいっぱいとなりました。しびれの原因は、診断は、治療は、どうすべきか本当に悩みました。入院中さえ症状が悪化し、起立・歩行が困難となったり、失明したりする方もでてきました。これは感染する疾患なのだろうか。私など実際に治療にあたるものは、本当に不安でした。

私は、昭和四二年の夏ころでしたが、黒岩義五郎教授よりいきなり「君はSMON研究をライフワークとしなさい」と命じられました。最初に担当を命じられていた講師の先輩が留学されたので、その後任を託されたのだと思っております。こうして私は、SMONの研究に本格的に取り組むこととなりました。

その後にSMONに対して驚くべき研究がなされてき、これが新しい疾患単位であったこと、原因が究明され、それが医原性疾患であったこと、しかもその発症が完全に撲滅さ

れたことなど、私なりの見聞と貴重な体験を後世に残しておきたいと考え、教科書執筆に加えて、あえて筆をとることに致しました。

\*岩下宏「スモン劇場」〔北九州市医報〕617巻、2008年）

平成三三年一月

緑の天啓——S M O N 研究の思い出●目次

はじめに 3

## I 奇病発生

S M O N はいづごろから発生し始めたか？ 13

S M O N についての学会の動向 16

勝立病をめぐつて 19

勝立病研究の取り組み 22

むらぎも会との連携 26

福岡市での疫学調査 29

黒岩義五郎先生と「神経内科」 33

黒岩義五郎教授と疫学と S M O N 39

## II 病像確立

新しい疾患単位としての S M O N 49

## III 原因判明

緑の窓口 81

緑毛舌、緑便そして緑尿、そして緑色物質の解明 86

S M O N の発生とキノホルム剤服用とは関連がある 93

九大もキノホルム説 99

S M O N にみられるイレウス様症状とキノホルムとの関連 105

S M O N と実験的キノホルム中毒の病理 110

キノホルムの吸収、代謝、分布 116

## IV 完全終息

---

キノホルム原因説に対する厚生省の動き 129

キノホルムの神話をめぐって 134

薬害としてのS M O N 140

豊倉康夫先生のS M O Nにかけた思い 146

終わりに 155

I

---

奇病発生

S M O Nはいづころから発生し始めたか？

S M O Nという病気はいったいいつころから発生し始めたのだろうか？ この質問はS M O N研究を行っていた当事者である我々自身が非常に興味をもっていたところでしたが、なにしろ最初のころは疾患概念がはっきりと確立しておらず、さまざまな病名で発表されていたため、どの論文が最初の報告かなかなかわかりませんでした。

S M O Nが多発し始めたのは昭和三九ころとされています。しかし、高須俊明先生<sup>①</sup>によりますと、昭和一三年にわが国ですでにキノホルムを内服しS M O Nを思わせる神経症状を示す症例が発生していたこともカルテの調査でわかりました。実際に症例報告が出だしたのは、昭和三三年になってからのことです。

昭和三三年には、和歌山医科大学第二内科の楠井賢造教授<sup>②</sup>が頑固な出血性下痢の治療中に多発性神経炎を合併した一症例を、「精神神経学雑誌」に学会報告をしておられます。この論文には治療した薬剤の記載はありませんが、楠井教授はこの神経疾患に注目され、昭和三五年、三七年、三八年にも次々と症例を追加され、腹部症状に続いて多発性硬化症に似た「急性播種性脊髄炎」が起ることに注目しておられました。



特に昭和三八年に報告された論文<sup>(3)</sup>には、重症な神経症状が出現した三症例では、それが出現する前に、キノホルムの一つであるエンテロビオホルムが処方されていたことが明記されておりました。これはキノホルム中毒を最初に示唆した報告例と言えます。とにかく和歌山県には何か特殊な神経症状を示す症例が多発していることを指摘されました。

昭和三四年九月には、東北大学鳴子分院内科の花籠良一先生<sup>(4)</sup>が、「温泉治療が著効を呈した急性横断性脊髄炎」の四例を、日本内科学会東北会地方会に発表しておられます。この四例は、急性の下痢の後に脊髄症状が出現しており、細菌性ないしウイルス性下痢が脊髄症状を起こしたと指摘されています。この症例報告以降、東北大学温泉医学研究所（杉山尚教授）では、S M O N の「温泉治療」に精力的に取り組んでおられます。

昭和三四年一二月に、三重県立大学の高崎内科から「腸疾患経過中に発生した下半身麻痺の症例について」と題して日本内科学会東海地方会で二症例が発表されました。この学会発表に対して、活発な質疑応答がなされました。同様の症例は、三重県立遠山病院（西村誠先生）<sup>(6)</sup>でも一三例あること、名古屋第一赤十字病院（阿部鏡太郎先生）<sup>(7)</sup>でも三例あること、岐阜大学高森内科（竹内三郎先生）<sup>(8)</sup>でも四例あることが追加発表され、大きな話題となったことがうかがえます。

高崎浩教授<sup>(9)</sup>による「日本内科学科雑誌」の論文では、二症例について頑固な腸炎（ブドウ

球菌などや赤痢）に続いて「亜急性」に下肢より上行性に、しかも対称性に知覚障害と運動麻痺が出現しており、膝反射は正常ないし亢進していましたが、アキレス反射は消失ないし正常でした。一例に病的反射が認められました。しかし、髄液検査では明らかな異常所見は認められていませんでした。いずれも神経症状の改善がみられていました。

昭和三五年一月には、県立山形病院の清野裕彦先生<sup>(10)</sup>が、「腸症状をもつて初発せる散在性脳脊髄炎症例」と題して、日本内科学会東北地方会に一二例を発表されました。これらの症例は、胃腸症状、特に粘膜炎ないし血性下痢を伴う腹痛、あるいは激しいイレウス様腹痛をもつて始まり、漸次散在性脳脊髄炎の像を呈していました。山形県でも何か特殊な神経疾患が多発していることがわかります。

今回、本書をまとめるにあたり、S M O N 初期の論文を手当たり次第に集めて分析してみました。その結果、S M O N の最初の論文はやはり昭和三三年に発表された和歌山医科大学の楠井賢造教授<sup>(11)</sup>によるものであることを確認しました。またS M O N が相次いで学会発表されるようになったのは昭和三四年の秋以降のことであるともわかりました。

ただ、興味深かったことは、特別に注目されてはいませんでした。が、東北、東海、近畿などまったく異なった地域で、腹部症状を伴う一種特異な神経症状を示す例が数多く発生していることに多くの内科医が気づいていたことでした。また内科学会地方会が情報提供と交換

の貴重で重要な場であったことも知りました。

随分昔になってしまいましたでしたが直接にお会いし議論を重ねた数多くのかたがたを懐かしく思い出し、あえて肩書きと共に「先生」と記させていただきます。

## S MONについての学会の動向

S MONという特殊な神経疾患が全国的に多発していることが知られるにいたり、昭和三七年に開催された第三回日本臨床神経学会では、シンポジウムとして「[Myeloradiculoneuritis]というテーマでS MONが取り上げられました。このシンポジウムでは、名古屋大学第一内科の安藤一也講師が、過去一〇年間に同内科を受診し、原因不明であった多発神経炎の七〇症例と脊髄根神経炎八〇症例について、腹部症状などの臨床症状と神経学的所見との関連を極めて緻密に検討して報告されました。これは膨大なカルテの中から神経症状の分析を行って発表されたものでした。名古屋大学第一内科は、後に多発神経炎などの末梢神経障害の研究領域ではわが国の主導的役割を果たすことになります。この発表が研究の動機付けの一つになったのではないかと推測しております。

安藤先生は、S MONの神経症状に関する論文をたくさん残しておられ、後に特定疾患ス

モン調査研究班の第三代班長に就任され、スモン患者さんの全国的な検診体制を構築し、救済に精力的に活躍されました。一方、先生は私と同じくモントリオール大学の神経薬理研究室（主任・アンドレ・バルボウ教授）に留学され、パーキンソン病の治療や予後についても優れた論文を数多く出しておられます。安藤先生は、私にとってはモントリオール大学留学の先輩にあたります。私自身、先生と親しくさせていただき、S MONの領域でも、パーキンソン病の領域でも、先生から多くのことを教わりました。

このシンポジウムでは、関東通信病院の第三内科の加瀬正夫先生も、S MONと思われる自験例四七症例について神経症状を分析され、腹部症状と関連した一連疾患群の鑑別診断について詳細に報告されました。この症例の中に、腹部症状として腸管麻痺、イレウスを来した症例を記載しておられます。加瀬先生も日本の臨床神経学会の先駆者のひとりです。

同じく、このシンポジウムでは、勝木司馬之助教授をはじめとする九州大学第二内科の神経グループが「下痢後に現れた脊髄炎または脱髄性疾患の六例」を発表されました。この発表の考察の締めくくりに「私どもは、本症にしばみられた消化器症状、就中下痢という症状をとらえて、これを究明していくことも本症の原因究明の一つの手がかりとなるのではないかと考えているものである」と述べておられるのが大変印象的でした。

この神経学会のシンポジウムでは、腹部症状が前駆し、下肢の強いしびれを主徴とした多

表1：SMONにつけられてきた極めて多彩な病名

下痢	→	脊髄炎
下痢の		脊髄症
下痢を伴う		脳脊髄炎
下痢に続発する		散在性脳脊髄炎
腸症状に始まる		脳脊髄根神経炎
腸炎後の		急性多発性神経炎
腸疾患後の		下半身麻痺
腸疾患経過中に発生した		下肢麻痺
胃腸炎に毒初する		下肢対麻痺
消化器症状を伴う		神経障害
腹部症状を伴う		非特異性脳脊髄炎症

発神経炎や脊髄炎と診断された症例群の中には、なにか臨床的特徴があるか否かが議論されました。このシンポジウムを契機として全国の神経内科医がSMONに注目し本格的に研究に取り組むようになり、夥しい研究成果が発表されることになりました。

それから二年後、昭和三十九年の第六一回日本内科学会では、会頭の前川孫二郎京都大学教授によってSMONが取り上げられて、楠井賢造和歌山大学教授の司会のもとにシンポジウム「非特異性脳脊髄炎症」が開催されました。このシンポジウムでは、SMONが従来から存在する疾患の一亜型であるか、またはそれに近いものであるか、反対にそれらとはまったく異なる新しい一つの疾患単位といえるものかの討議を行うのが目的であったようでしたが、結論的にいってSMONを一つの症候群とする考え方と臨床的にも病理学的にも特徴ある独立し

た疾患とする考え方と意見が分かれてしまいました。SMONには豊倉先生<sup>15)</sup>がまとめられた表1のような極めてたくさん<sup>16)</sup>の病名がつけられておりました。

結論は後日の研究に待つという結果に終わりましたが、SMONの病像は次第に絞られてき、後者が徐々に一般的となってきたように思いました。

病名もこの後「Myeloradiculoneuritis」から「非特異性脳脊髄炎症」へ、さらには「腹部症状に伴う脳脊髄炎症」が広く使用されるようになりました。SMONという名前が登場し、さらに「スモン」が一般的となるのはもう間近なところへきておりました。

## 勝立病をめぐる

今回、「SMONの思い出」をまとめるにあたり、九州大学医学部から発表された論文などの資料を集めうるかぎり取り寄せてみました。最初のころの第二内科や神経内科からの論文を並べてみると、論文の共同研究者の中にいつも「鈴木文郎」という先輩がおられることがわかりました。かれこれ四〇年以上も昔になりますが、私がSMON研究に取り組むことになったとき、黒岩教授から最初に、君「鈴木君」知ってる？「鈴木君」からいろいろ教えてもらったらどう、と何度か言われたことを思い出しました。特に疫学研究を命じられ



井上尚英  
(いのうえ・なおひで)  
昭和39年九州大学医学部卒。  
現在、九州大学名誉教授。  
著書：化学・生物兵器概論。生  
物兵器と化学兵器。事件  
から見た毒。図解雑学・  
生物兵器と化学兵器。  
監修：中毒学概論。魔性の煙霧。



みどり てんけい  
緑の天啓  
スモンけんきゅうおもで  
SMON研究の思い出

2011年12月26日 第1刷発行



著者 井上尚英

発行者 西 俊明

発行所 有限会社海鳥社

〒810-0072 福岡市中央区長浜3丁目1番16号

電話092(771)0132 FAX092(771)2546

印刷・製本 大村印刷株式会社

ISBN 978-4-87415-837-1

<http://www.kaichosha-f.co.jp>

[定価は表紙カバーに表示]